想像界の生物相

泣く子をだまらすアイヌのお化け

民博 学術資源研究開発センター　齋藤（さいとう） 玲子（れいこ）

資料名｜キサラリ（耳長お化け）
標本番号｜H0062343
地域｜日本、北海道平取町二風谷
サイズ｜長さ 62 cm

今回紹介するのは、これまでの連載で取り上げられてきた怪物や精霊のようなものではなく、子どもをおどかすために大人が作ったものである。萱野茂（かやのしげる）氏（一九二六～二〇〇六）の著書『アイヌの民具』（すずさわ書店、一九七八年）に掲載され、写真のとおり、みんぱくにも同氏が作った〝実物〟が所蔵されている。

北海道平取町二風谷（ひらとりにぶたに）で育った萱野氏は、著書『おれの二風谷』（すずさわ書店、一九七五年）で、子どものときに恐ろしかったものとして、キサラリを挙げている。二冊の著書の記述を総合すると、「自分でも忘れないくらいの年令」の子どもが泣きやまないとき（特に夜泣き）、隣近所の大人が急いで作って、泣いている子の家の窓の外に行き、家のなかからは人間が動かしていることがわからないように体をかがめて、ちらりちらりと見せながら、「ぐふーう、ぐふーう」と獣か鳥かわからないような音でおどかすのだという。

◆◆◆お化けの正体◆◆◆

キサラリの本体は草などを刈る鎌で、草の束ふたつに赤い布を巻き、くちばしに見立てた鎌の刃の両側に耳のように配し、鎌の刃から柄の上半分くらいまでに黒い布を巻き付けて作る。キサラリはアイヌ語でキサラ（耳）リ（高い）で、萱野氏は日本語訳を「耳長お化け」としているが、くちばしと耳の長さは同じくらいで二〇センチメートル弱というところである。また、鎌は「女の道具」であり、魔を祓（はら）うことができる特別な道具と考えられており、そのため子どもをおどかすお化けを作ると効き目があると信じられてきたそうだ。

あまり明るくもない家のなかから、窓の向こうの暗闇に見え隠れする低く奇妙な声の「お化け」を見ると、たいていの子はぴたりと泣きやむという。その声の出し方は、歯を噛（か）み合わせ舌を前歯の方にくっつけて、唇を引きかげんにして奥歯の後ろの方から息を強く吹き出すそうだ。一度おどかされると、次に泣いたとき「キサラリ　エッナ（キサラリが来るぞ）」と言われ、「もう泣かないものだった」とのことである。

◆◆◆伝承に見る妖怪◆◆◆

キサラリは人が作った「お化け」だが、アイヌの伝承には、巨大な怪魚や、河童（かっぱ）のような化け物、病気や災いをもたらすカムイ（神）など、異形の生き物がたくさん出てくる。教員としてアイヌ児童の教育に携わりながらアイヌ文化に関する多くの著作を残した吉田巌（よしだいわお）（一八八二～一九六三）は、「アイヌの妖怪説話」「アイヌの妖怪説話（続）」（『人類学雑誌』二九（七）・（十）、一九一四年）で、三八の説話と四〇ほどの化け物などについて報告している。そして、吉田は（日本文化と同じように）「アイヌもやはりエテッキチシ、オコツコエツキ（泣くな、お化来るぞ）とかうやる。（中略）背に負はれ、胸に抱かれて既にお化のおそろしい観念がつく」とし、年長者らから人の死や病、「その他の災禍危難を（中略）化物の仕業として解釈する」ように聞いて育ってきたので、子どもたちのあいだで妖怪談がとても多いと書いている。そこには今の倫理上はそのまま引用できない表現も出てくるが、長くアイヌの児童と接してきた吉田の実感なのであろう。

子どもにいうことを聞かせるために「お化けが来るぞ」とおどかすのは、万国共通。しかし、そのお化けの姿形や仕草には、土地柄があるようだ。キサラリが平取以外の地域にもあったのか今のところわからないので、地方差があるのか、調べてみたい。